

仁王般若經に就て

伊藤古鑑

佛敎の護國思想で有名な經典は『法華經』と『最勝王經』と『仁王般若經』とである。その他にも『守護國界經』『優填王經』『勝軍王所問經』『大薩遮尼乾子經』を始め、『心地觀經報恩品』『六度集經布施篇』の如きものも數へらるゝのであるが、しかし前に掲げた三部の經典は、常に鎮護國家の三部の大經と云ひ、最も重要な位置にあつて多く研究されて居たやうに思ふ。

佛敎は我が日本の欽明天皇の朝に始めて傳へられたのであるが、しかし日本の上下に等しく流布するやうになつたのは推古天皇の朝であらう。即ち『日本書記』第二十二、推古天皇二年の條に、

春二月丙寅朔、詔皇太子及大臣、令興隆三寶、是時、諸臣連等、各爲君親之恩、競造佛舍、
卽是謂寺焉。

と云はれ、同第十二年の條に太子の憲法十七條が制定せられ、同第十三年の條には佛像建立のことが出て居る。これより代々の天皇の御歸依を受け、中にも御信仰の餘り、畏くも入道出家し給ひしを始め、天皇、親王の尊貴の御身でありながら、佛法に關する御著述のありしことなど實に恐懼の

仁王般若經に就て

(一)

至りである。また宮中の恒例法會あり。また諸大寺に命じて勅修の大法會あり、眞に皇室と佛教との深厚なる御因縁を有するものと云はねばならぬので、これ偏へに佛教は鎮護國家の思想に富み、國利民福を主として居たからであらう。奈良朝時代から平安朝に及んで本地垂迹の説起り、傳教弘法兩大師の著述には、主として鎮護國家、國利民福の思想に傾いて居たやうに思ふ。即ち傳教大師には三部大經の講式『傳教大師全集』第二三三五丁があり、『法華經』は申すまでもなく、天台宗正所依の經典として研究せられ、『金光明最勝王經』は天台五小部の隨一として、これ亦大に研究され、『仁王般若經』に於ても『註仁王經』三卷(『傳教大師全集』第四二六五丁)の御製作があつたのである。また弘法大師にしても『法華經開題』『最勝王經開題』『仁王經開題』『弘法大師全集』第四)等の御製作があつて、共に護國思想を鼓吹せられ、實地に之れを行つたと云ふことは、争はれぬ事實であると信ずる。

いま私が此の鎮護國家の三部の大經の中に於て、特に『仁王般若經』を擇んで、これに就て一言したいと思つたのは、決して護國思想の研究に就て論ずるのではなく、たゞ此の『仁王般若經』が般若の思想として、最も良く進んだ内容を持つて居るので、私が常に般若思想を研究して居る關係上、興味を抱いて少しく此の經典を説明して見たいと思つたに過ぎぬのである。素よりその叙述は平凡に終るかも知れぬが、今の時代は大に護國思想を鼓吹せなければならぬ非常時である。故にこの平

凡な叙述に依つて、更に深く護國思想等を研究せらるゝ人ありとせば、大に私の幸甚とするところである。

二

この『仁王般若經』は玄奘三藏翻譯の『大般若經』六百卷の中には收められて居らない。申すまでもなく『大般若經』は玄奘三藏當時までに行はれて居た般若部の經典を盡く網羅された一大叢書であるのに、何故に此れに加へられて居ないのか、これは非常に『仁王般若經』を研究する上に於て、大に注意すべき點であらうと思ふ。或る學者の如きは、これを以て彼の『大般若經』編纂の後に出來たものと云ふ證據にして居るが、しかし『大般若經』に入れてないからと云ふて、この一ヶ條のみにて論ずるのは早計であらう。既に玄奘三藏已前の人で、この『仁王般若經』の末註を書いて居るのを何と見るべきか、これ等の點をも考慮に入れるべき必要がないではないか。

いま更に此の經の翻譯等に就て一考するに、先づ第一に此の經の種類には廣略の二本があつたやうに云ふて居る。廣本とは本文の「散華品」に出て居る十萬億偈の經典であらう。天台大師の『仁王護國般若經疏』第一にも、

經自有兩本、一廣說、如散華品云、爾時十六大國王、聞佛所說十萬億偈般若波羅蜜、散花供養。二者略本、即今經文。(『正藏』三十三卷二五四丁)

と云ひ、更に譯本として三種類を擧げて居る。また同時代の嘉祥大師も『仁王般若經疏』を製作せられて居るが、種類及び譯本の問題に就ては、少しも書かれて居ない。また唐の圓測の書いた『仁王經疏』上卷本に、天台大師と同じく廣略二本を擧げ、略本に三種の譯本を示して居る。(『正藏』三十三卷三六一丁)故に此の廣本と云はるべきものは、世間流布の『仁王般若經』ではない。謂ゆる華嚴に於ける法爾恒說の本とか、眞言に於ける三世常恒、法爾無作の經典とか云ふものと同じで、宇宙の大文章であり、自然の大經典を直ちに『仁王般若經』と見たものである。而して此の廣本たる『仁王般若經』を縮寫して、現今分流の略本となしたものと云ふべきであらう。略本に四種類あり。即ち左の如し。

一、『仁王般若經』一卷、西晋太始元年、月支國三藏曇摩羅蜜(法護)譯

二、『仁王護國般若波羅蜜經』二卷、姚秦弘始三年、龜茲國三藏鳩摩羅什(童壽)譯

三、『仁王般若經』一卷、梁永聖三年、西天竺優禪尼國三藏波羅末陀(眞諦)譯

四、『仁王護國般若波羅蜜多經』二卷、唐永泰元年、大興善寺沙門阿目佉(不空)譯

この外に密教に於て用ゆる『念誦儀軌』二卷、『念誦法』一卷、『陀羅尼釋』一卷等があるけれども、今は且らく前に擧げた四譯のみに就て少しく論じて見やう。

『仁王般若經』の四譯の中、前の三譯に就ては殆んど信用を置くべき價值がない。素より其の譯出

に就て道安の經錄になく、僧祐の『出三藏記集』第四には、「新集續失譯雜經錄第一」の中に、

『仁王護國般若波羅蜜經』一卷(『正藏』五十五卷二九丁)

と云ふて、經名だけ出て居るから、その當時は失譯としてあつたものに相違ない。しかし其れが法護譯であるとか羅什譯であるとかと云ふことは素より不明である。更に同第八に、大梁皇帝の『註解大品序』なるものが出て居るが、その中に、

唯仁王般若具書各部、世既以爲疑經、今則置而不論。(『正藏』五十五卷五四丁)

とあるから、梁の時代には僞經として餘り用ひなかつたものゝやうである。また隋の沙門法經等が撰述せる『衆經目錄』第二にも、この經を疑惑錄に編し、その理由として左の如く云ふて居る。

『仁王經』二卷、別錄稱此經是竺法護譯、經首、又題云是羅什撰集佛語、今案此經語始末義理文詞、似非二賢所譯、故入疑錄。(『正藏』五十五卷二二六丁)

これに依つて考へて見ると、この『仁王經』には別錄に竺法護譯と云ふてあるが、その當時に行はれて居た『仁王經』には、首卷及び題號に「羅什撰集佛語」と書いてあつたに相違ない。而して其の經の始末義經文詞を案するに、竺法護、鳩摩羅什の二賢の所譯とは思はれないから、疑惑錄の中に入れたと云ふ意味であらう。然るに其の次ぎに出た費長房の『歷代三寶記』第六には、竺法護の條に、

『仁王般若波羅蜜經』一卷或二卷見
晋世雜錄、『正藏』四十九卷六十二丁)

と云ふて、竺法護の眞譯のやうに取り扱つて居る。即ち『歷代三寶記』に云ふ「晋世雜錄」とは如何なるものであらうか、素より不明であるけれども、恐らくは前の法經の云ふた別錄と同じものであらう。而して法經は僞惑となし、費長房は依憑して居るやうに思はれる。また『歷代三寶記』第八の鳩摩羅什の條に、

『仁王護國般若波羅蜜經』一卷見別錄。第二出。與晋世
錄竺法護出者文少異、『正藏』四十九卷七八丁)

と云ひ、これもまた羅什譯のあつたことを認めるやうに思ふ。更に下つて『歷代三寶記』第十一の波羅末陀、即ち眞諦の條に、

『仁王般若經』一卷第二出。與晋世法護出者少異。
同三年在寶田寺翻。見眞諦傳。、『正藏』四十九卷九九丁)

と云ふて居る。第二出とは恐らく第三出の誤りであらう。而して眞諦には『仁王般若疏』六卷があつて、太清三年出と註して居る。故に費長房の考へでは、『仁王般若經』に三譯ありと認めて居たやうで、『歷代三寶記』第十三にも、『仁王般若波羅蜜經』二卷凡三譯(『正藏』一〇〇丁)と云ふて居ることに注意せなければならぬ。

而してまた、これと殆んど同時代に出た『衆經目錄』として、隋の翻經沙門及び學士等の撰述せるものには、第一卷の單本と云ふ部に『仁王般若經』二卷(『正藏』五十五卷一五二丁)と云ふて眞本の如

く取り扱つて居るが、譯者の名は擧げてない。また同書第五卷の闕本と云ふ部へ、眞諦譯を入れて居るやうである。即ち、

『仁王經』一卷重續闕本 陳眞諦譯(『正藏』五十五卷一七五丁)

と云ふのが其れである。而して此等の三經錄は殆んど同時代のもので、各々其の見るところに依つて記述され、吾人に取つては大に興味を喚起する問題であると信する。即ち法經の『衆經目錄』は、隋の文帝、開皇十四年(西紀五九四)に出で、費長房の『歷代三寶記』は同じく開皇十七年(西紀五九七)に出で、繡經沙門及學士等撰の『衆經目錄』は隋の文帝、仁壽二年(西紀六〇二)に出で居るのであるが、それが此の『仁王經』に對して、或は疑惑と取り、或は眞諦と見なして居ることに注意せなければならぬ。現今の學者は多く法經の説を取つて、恐らくは三譯共に信するに足らずとなして居るやうに思ふ。素より梁の時代に偽經として『仁王般若經』なるものがあつたことはあつたに相違なからう。それを『晋世雜錄』とか何とか云ふ別錄には竺法護譯と傳へ、また卷首及び題號に誰人か鳩摩羅什譯と書いたが爲めに、こゝに竺法護譯と鳩摩羅什との二譯があつたやうに『歷代三寶記』が誤り傳へたものであらう。故に法經は之れを信せず、また仁壽二年撰の『衆經目錄』にも譯者の名を擧げてない。またこれを繼承した靜泰は明かに『仁王般若經』二卷二十八紙(『正藏』五十五卷一八三丁)と云ひながら、その譯者の名を擧げて居らないのに注意せなければならぬ。

尙眞諦三藏ありなど、『歴代三寶記』に云ふけれども、これ亦、信するに足らぬ説であつて、誰人もこれを見たと言ふものがない。仁壽二年撰の『衆經目錄』や、靜泰の『衆經目錄』に於て、闕本部に入れて居ることに注意せなければならぬ。また眞諦三藏に『仁王般若經疏』六卷があつたと、『歴代三寶記』に傳へて居るが、これ等の妄説なることは學者の既に發表されたことで、今更こゝで論ずるまでもないことである。

故に今日、『仁王般若經』に三譯ありなど、云ふことは信用されないやうに思ふ。而して其の誤謬の根源をなしたものは費長房の『歴代三寶記』であつて、それを繼承した道宣の『大唐内典錄』が第二第三第四の竺法護、鳩摩羅什、眞諦の條の一々に於て、その翻譯のあつたことを明記したる爲に失譯であり、僞經であると云はれて居たものが、終に譯者の名が顯はれ、眞經の如く取り扱はれるやうになつて、それより已後の靖邁の『古今譯經圖記』も、その一々の條に經名を擧げて、三譯があつたやうに傳へ、それよりも新らしい『大周刊定衆經目錄』とか『開元釋教錄』とかにも、みな『仁王般若經』には三譯ありと云ふことになつて仕舞つたのである。

三

この『仁王般若經』の末註として、最も古いものと思はれる天台大師の『仁王般若經疏』に於て、左の如く云ふて居る。

問、古人云、仁王經非正傳譯、是事云何、答、寡識小智深可憐愍、豈有不見目錄、即云非是正翻、海庸不信山木似魚、夏華亦云、古初無物、嗚呼盲目錄、玻璃珠、且準下經、自有兩本、一廣說——二者略本、即今經文、譯者不同、前後三本、一者晉時永嘉年、月支三藏曇摩羅察、晉云法護、翻出二卷、名仁王般若、二是偽秦弘始三年、鳩摩羅什於長安逍遙園別館翻二卷、名佛說仁王護國般若波羅蜜、三者梁時真諦、大同年於豫章寶因寺翻出一卷、名仁王般若經、疏有六卷、雖有三本、秦爲周悉、依費長房入藏目錄云耳。（『正藏』三十三卷二五四）

と云ふて居るが、これ亦費長房の『歷代三寶記』に依つて居ることは明かである。次ぎに唐の圓測の『仁王經疏』は殆んど天台大師と同じく、やゝ加へた點もある。即ち左の如し。

梵本雖一、隨譯者異、乃成三本、一者晉時秦始元年、月支國三藏法師曇摩羅蜜、晉云法護、翻出一卷、名仁王般若、二者秦時弘始三年、三藏法師鳩摩羅什、秦言童壽、於常安西明閣逍遙別館、翻出一本、名仁王護國般若波羅蜜、三者梁承聖三年、西天竺優禪差國三藏法師波羅末陀、梁言真諦、於豫章寶因寺、翻出一卷、名仁王般若經、疏有六卷、雖有三本、晉本創初、恐不周悉、真諦一本、隱而不行、故今且依秦時一本、依費長房三寶錄、三譯皆言一卷、然費學七入藏目錄、即云兩卷（『正藏』三十三卷三六一）

これに依つて見ると、やゝ翻譯の年代に就て相違する點がある。即ち法護譯は晉の秦始元年（西紀

二六五)と改め、眞諦譯は梁の承聖三年(西紀五五四)となつて居るのであるが、しかし竺法護の翻譯せられた年代は、秦始皇二年(二六六)から永嘉二年(三〇八)までと云ふのであるから、この四測の説は信ぜられない。それに「晋本創初、恐不周悉」とあるから、現存はして居なかつたものであらう。また眞諦譯は「隱而不_レ行」と云ふて居るから、これ亦論ずる程のものではない。疏の六卷は太清三年(五四九)に書いたと云ふが、本經を翻譯せない已前に注疏を書いたものが大に疑問の焦點となることであらう。残る一本の羅什譯は古來よりあつた一本で、謂ゆる梁時代に僞經とされて居たものであらうと信ずるが、これ亦年代に不審の點がある。即ち羅什が弘始三年(西紀四〇二)に長安逍遙園別館で翻譯したと云ふけれども、羅什の長安に到着したのは弘始三年十二月二十日であるから、とても年内に翻譯したなどとは思はれない。故に此の一點だけでも先づ疑問と云はねばならぬが、そのみならず、今日傳はつて居る羅什譯の『仁王護國般若經』は、とても羅什譯とは信ぜられない箇處が多いので、その全體の文章が拙劣で、甚だ流麗を缺き、譯語が他の羅什譯と云はれるものに比較して、大に相違すると云ふのである。これ等も今日の學者が等しく指摘すること、こゝに詳論する必要はなからうと思ふ。

かくの如く『仁王般若經』の翻譯に就ては、遺憾ながら三譯ともに疑問の點があり、今日傳はつて居る一本さへも羅什譯としては信ぜられないのである。或る人は隋唐時代に支那で製作したのも

と云ふて居るが、しかし、私は其れよりも已前にあつたものと思ふ。既に梁朝時代に偽經と云はれて居たのであるから、慥かに隋唐已前のもので、支那で製作したと云ふよりも、その原典が印度に行はれて居たものではなからうかと信ずる。何となれば、この三譯已後に於て、唐の肅宗皇帝が不空三藏をして翻譯せしめやうとして果たし給はず、代宗が永泰元年(西紀七六五)四月二日に詔して『仁王般若經』を翻譯せしめ給ふたと云ふて居る。即ち良賁の『仁王護國般若波羅蜜多經疏』上卷一に、

粵惟巨唐、肅宗皇帝、重昌堯化、革弊救焚、至憂黎元、深心齋戒、請南天竺執師子國灌頂三藏、名阿目佉、唐云不空、翻譯傳衆經、以安社稷、茲願未滿、仙駕歸天、我今、寶應皇帝、再造乾坤、禮樂惟新、明白四達、恭嗣先訓、恩累請焉、永泰元年歲在乙巳四月二日、詔曰、如來妙旨、惠洽生靈、仁王寶經、義崇護國、前代所譯、理未融通、望依梵夾、再有翻譯、貝葉之言、永無漏略、金口所說、更益詳明、仍請僧懷感等內道場所翻譯、福資先代、澤及含靈、寇盜水清、寰區允穆、傳之曠劫、救護實深、(『正藏』三十三卷四三〇丁)

と云ひ、乃ち南桃園に於て、月朔より月望になつて翻譯されたと説いてある。而して新經舊經その理が甚だ符順し、しかも新經の文義が稍々圓かになり、金言が聖心に冥契し、佛日が再び輝いたと云ふやうな意味が附加されて居るやうに思ふ。

かくして見れば新經なるものは、梵夾に依り、貝葉に依つて翻譯せられたことは事實であらう。故に印度にあつたもので、支那で製作せられたものとは信ぜられない。それは支那で製作せられたものを印度に翻譯し、それがまた新經に翻譯せられたものと云ふ人もあらうが、しかし私は、そうまでは疑ふ必要ないと思ふ。素より今日、傳はつて居る羅什譯の本文には、支那臭味の點はないではないが、總べて疑つてかゝれば際限のないものである。

四

『仁王般若經』の翻譯に就て、大體の敘述を試みたのであるが、現今一般に用ひられて居る羅什譯は、どうしても羅什譯とは思へないのである。而して亦、新經と云ふて居る不空譯も、良賁の『仁王經疏』には、羅什譯よりも勝れて居るやうに記載されて居るが、その實は餘り感心が出来ないのである。故に不空三藏の法系に屬する日本の弘法大師の如きは、その著の『仁王經開題』にさへ左の如く物語つて居らるゝ。

然晋本方言尙隔、梁本隱而不行、唐本間以流布、秦本盛傳、字内、今所講者、是其本耳。(『弘法大師全集』四四二—二一丁)

これに就て「晋本方言尙隔」とあるが、大師は決して見て居られたものではなからう。即ち晋の法護譯と云はるべきものは無いのであるから、大師の見られた筈はない。恐らくは『貞元錄』の本

文に依つて書かれたものであらうと云はれて居る。要するに新經たる不空譯も餘り用ひられなかつたと云ふことは事實で、その末釋も良賁等の二三を除く外は盡く羅什譯と云はれる舊經に依つて居るので、『續藏』及び『大日本佛教全書』にも、有名なる末釋は集められて居る。

然らば此の如く翻譯上に疑問のある『仁王般若經』が、何故に古來より多く研究せられ、未註も可成り多く製作せられ、また大切に讀誦せられ修法せらるゝやうになつたものであらうか。私は之れに就て、更に其の内容の本文に入つて少しく研究した結果を述べて見るならば、先づ此の經典ほど巧みに般若思想を詮表して居るものはないと信じて居る。それには多少、般若的思想でないものも混入されて居るが、しかし他の般若部の經典に比して、餘りに内容が秩序立つて居るやうに思ふ。要するに此の經典は、仁王と護國と般若との三思想に依つて聯結された經典で、般若部の經典の中に於ても、非常に遅く成立したものであることは、經中の本文に依つて明瞭である。即ち左の如し。

大覺世尊、前已爲我等大衆、二十九年說摩訶般若波羅蜜、金剛般若波羅蜜、天王問般若波羅蜜、光讚般若波羅蜜、今日如來、放大光明、斯作何事。(『正藏』第八卷八二五丁)

これは「序品」の本文であるが、次ぎの「觀空品」にも、「如光讚般若波羅蜜中說」と云ふてある。而して前に掲げた『出三藏記集』第八に出て居る大梁皇帝の『注解大品序』に、

講般若者多説五時、一往聽受似有條理、重受研求多不相符、唯仁王般若具書各部。(『正藏』五十五卷五四丁)

と云ふて居るが、この五部とは今の『摩訶般若』『金剛般若』『天王問般若』『光讚般若』と、更に此の『仁王般若』とを加へたものであつて、この五部の名目を列ねて居るが、世は既に『仁王經』を以て偽經として居るから、今は置いて論ぜずと云ふ一節がある。兎に角、この『仁王般若經』は前已に四種般若を説かれた後の經典と見なければならぬ。必らずしも後に出來たから勝れて居るとは云へぬが、しかし仁王と護國と般若とを結び付けて、巧みに般若の思想を詮顯して居るところに、この經典の特長はあるやうに思ふ。即ち天台大師の『仁王般若經疏』には左の如く云ふて居る。

仁王是能護、國土是所護、由仁王以道治國故也、若望般若、般若是能護、仁王是所護、以持般若故、仁王安穩、若以王能傳法、則王是能護、般若是所護也。(『正藏』三十三卷二五三丁)

こゝに云ふ仁王とは何ぞや、この仁王に對して天台大師は因縁、約教、本迹、觀心の四種釋義を用ひて居らるゝが、要するに仁王とは聖主自在の徳を擧げたもので、仁とは施恩布徳の故に名づけ、王とは統化自在の故に呼んだものである。而かも此の仁王は内には佛果十地を護り、外には國土衆生を護るのであるが、その依つて來るところは偏へに般若の妙慧を以て根本とするのである。即ち般若の深奥なる教理を以て國家社會、個人の實際にまで持ち來つたと云ふのが一經の眼目であ

る。換言せば國王の國家を統治すると云ふことは、般若の教理を事實化することで、般若の教理を體驗することに依つて國家は統治せられ、唯だに一國家のみに局らず、全世界を通じて般若の現實化となり、財利を貪らず、法施を布いて精神を救済すると云ふのが根本義であるやうに思ふ。

かくの如くに『仁王般若經』の根本義が全然界を般若の現實化にすると云ふからには、そこに多少の翻譯上の疑惑があらうとも、また内容に於て般若思想に反する記事が加はつたり、支那臭味を帯べる言句が幾分か混入せられて居ても、これ仁王護國の妙法たるを失はず、盛んに支那に於ても日本に於ても高演宣布せられ、宮中に於てさへも修會講經が絶へなかつたものであらうと信ずる。而して此の經を最も推重し、これを講讚した始めは先づ天台大師であつたやうに思ふ。即ち『佛祖統紀』第六に依ると、陳の宣帝至德三年（西紀五八五、隋開皇五年）四月に、

詔赴太極殿、開大智度論題、及仁王般若經題、還寺就講、時百座居左、五等左右、慧暉、慧曠、慧辯、皆奉勅難問、天子臨筵聽法、百僚莫不盡敬、（『正藏』四十九卷一八二下）

と云ひ、更に再び太極殿に於て『仁王經』を講じ、天台大師の住房たる光宅寺に行幸せられて、「舍身大施、聽講仁王、躬禮三拜」せられたと云ふのであるから、如何に此の經典を尊崇せられたが明瞭にならう。

五

仁王般若經に就て

この『仁王經』の内容を知らうと思ふには、先づ天台大師の『仁王般若經疏』を始め、吉藏、圓測、良賁、善月などの末疏に依らなければならぬが、今は其の本文の一々に就て説明するのではなく、大體に於ける觀察を述べて見ることに致さう。

羅什譯と云はれて居るものと、新經と云はれて居る不空譯とに就て、その内容を對照すると殆んど同じである。即ち左の如し。

羅什譯

不空譯

一 序 品 — 序 品 — 序分(教起因緣分)

二 觀空品 — 觀如來品

三 菩薩教化品 — 菩薩行品

四 二諦品 — 二諦品

五 護國品 — 護國品

六 散華品 — 不思議品

七 受持品 — 奉持品

八 囑累品 — 囑累品

— 正宗分(聖教所依分)

— 流通分(依教奉行分)

かく對照して見ると、如何にも良く似て居るから、これは新經の不空譯は梵本から翻譯したもの

でなからう唯だ羅什譯と云はれる舊經を二三改竄したものであると云ひ、更に『仁王經』に梵本があつたと云ふことは、どうしても信することが出来ないと言ふ人がある。即ち慈恩大師の『瑜伽論略纂』第十に、「西方尋訪彼經（即ち仁王經を云ふ）未聞有本」と云ひ、また貞慶の『唯識同學鈔』第九之二に於ても「仁王梵本」と題する一章あり、それにも云く、

三藏大師久遊西天、普訪諸經梵本、而未聞有仁王梵本、知五天竺無其本。（『大日本佛教全集』二八八丁）

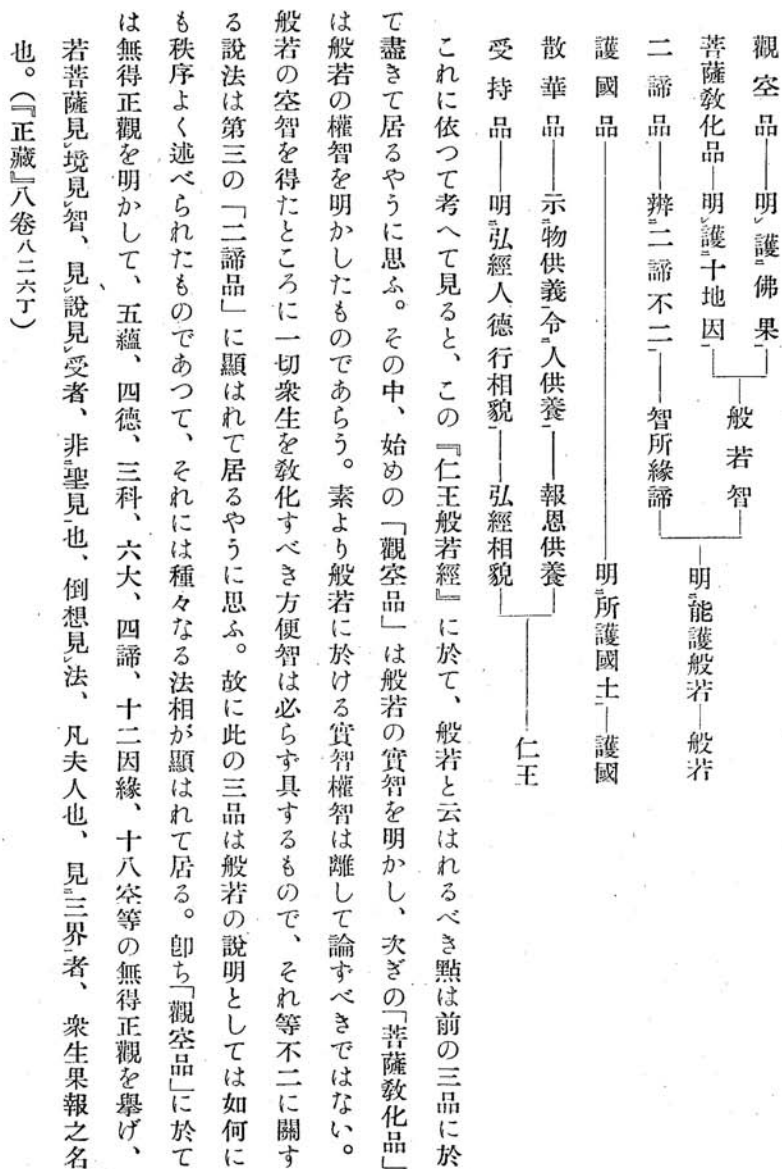
とあるが如きは、これ『仁王經』に梵本なき證據であつて、不空が梵本から翻譯したなどは眉に唾して見るべきものと主張されてるのであるが、しかしこれも一理あると云ふ丈けのことであつて、玄奘や慈恩の説を可信して居る人の説と見るべきであらう。これは前にも説明した如く、不空が梵本から翻譯したと云ふので、委しい事情は『大唐貞元續開元釋教錄』上卷（『正藏』五十五卷七五丁）にも出て居るが、これを信する人には、どうしても印度に梵本があつたと云はねばならぬ。故に玄奘や慈恩だけの説で、一概に非難する譯に行くまいと信する。

また、舊經と新經との内容を比較對照して見ると、新經の方が遙かに内容が整つて居て、舊經を改竄した形跡がありくくと見ゆると云ふのであるが、これも支那撰述を唱へやうとする爲めに、そう見らるゝので、その實は梵本の相違であり、譯者の考へも、また多少は加はつて居たかも知れ

ぬ。それ等は皆、その人の見やうに依つて相違するので、強ちに新經は舊經を改竄したもので、梵本がなかつたと断定する有力なる證左とはならぬであらう。いま私は此處で舊經と新經との内容を比較對照はせぬ。唯だ單に一般に用ひられて居る羅什譯と稱せらるゝものに就て、其の大體を述べて見ることに致さう。

先づ八品の中に於て、「序品」には常に云ふ通序と別序とがあつて、通序は餘經に通ずる五成就の經文であり、別序は此の經に特有のもので、その由來因縁を明したところである。即ち釋尊は既に二十九年の間、種々なる般若を説かれたが、般若談三十年の最後の正月八日に於て、この『仁王經』を御説法になつたと云ひ、明かに年時を表示して一經の甚深なることを詮顯せられて居るまた此の『仁王經』の會座の聽衆には寶蓋とか淨名とか云ふ大居士もあり、須菩提とか舍利弗とか云ふ大比丘もあり、彌勒とか獅子吼とか云ふ大菩薩もあつて、その説法の經典は甚だ幽遠であると云ふことも表示して居る。

次に「觀空品」已下六品は正宗分であつて、一經の趣旨は此處で充分に述べられて居る。今その大體を圖表にて示せば左の如し。



仁王般若經に就て

(一九)

など、云ひ、更に一切法は皆如なりと説いて、般若の實智を諸法實相と觀じ、而かも無所得皆空のところへ結歸せられて居るものであらう。第二の「菩薩教化品」は菩薩行化衆生の相を分けて五忍となし、更に其の一々に多くの法相を立て、居るけれども、要するに此れを十四忍に開いて菩薩修行の階位となし、衆生教化の菩薩法としたものであらう。次に第三の「二諦品」は般若の智慧に依つて縁ぜらるゝ二諦の境に就て説かれたもので、境が二諦であれば、それを觀する般若も不二であることは論を俟たぬのである。故に此の「二諦品」に於ては一切法空非一非二の道理を明かして、遠く過去七佛からの説法であるとなし、その深遠なる二諦不二を説いて、この經の得益と經名と附屬とを述べて一段落を告げて居るやうに思ふ。

於此經中、起一念信、是論衆生、超百劫千劫十地等功德、何況受持讀誦解說者功德、即十方諸佛等無有異、當知、是人即如來、得佛不久、時諸大衆、聞說是經、十億人得三空忍、百萬億人、得大空忍十地性、大王此經名爲仁王問般若波羅蜜經。(『正藏』八卷八二九丁)

これに依つてそれを考へて見ると、一經は既に此處に盡きて、般若の深旨は充分に顯はれて居るが、さて此處に尙ほ本經の特長とすべき護國思想が發揮されて居らない。故に僅かではあるが、「二諦品」の終りに「汝等受持般若波羅蜜、名爲護國土功德云々」と云ふて、次ぎの「護國品」に取りかゝる巧妙なる手段が講ぜられて居る。これは既に「觀空品」の最初にも「爾時、佛告大衆、知十

六大國王意欲問護國土因緣」と云ふて、先づ般若を初めに説き、能護を示したのであるから、素より此處に所護の國土を説き、更に仁王の相貌を顯はさなければならぬことは當然であるが、しかし、この「護國品」已下の三品は大に注意を要する點があつて、今までの内容とは餘程相違するところがあつてやうに思ふ。

六

『仁王般若經』としては仁王護國を明するのが主である。然るに此の「護國品」已下の三品に於て、前に圖表した如く「護國品」にては護國と明かし、次ぎの「散華品」「受持品」に於ては仁王を明かして居るのであるから、一經の主意は此の三品にあると云はねばならぬが、しかし、これが常に非難攻撃の的になつて居るやうに思ふ。何となれば、その全體が有相の福德利益を以て説かれ、般若無相の法門とは全然相容れないところのものである。また多く密教的思想を取り入れて居る點もあり、また支那臭味を帯んだ記事が其のところ／＼に挿入されて居るやうに思はれるから、前の三品よりは是れからの三品が疑惑の焦點となつて居るのであらう。いま其の一二の例を擧げるならば、「護國品」に於て、「天地恠異、二十八宿、星道日月、失時失度」と云ふが如き、「散華品」に於て、光明王佛とか獅子吼王佛とか云ふが如き、或は「受持品」に至りては、「二十八宿失度、金星、慧星、輪星、兎星、火星、水星、風星、刀星、南斗、北斗、五鎮大星、一切國主星、三公星、百官星

如是諸星、各々變現」と云ひ、或は金剛吼菩薩、龍王吼菩薩、無畏十力吼菩薩、雷電吼菩薩、無量力吼菩薩等の五大力菩薩が國を護つたと云ふやうな記事は明かに密教的思想が多く混入せられて居るものと云はねばならぬ。そののみならず、「受持品」に於ては神符とか避鬼珠とか、或は如意珠、護國珠、天地鏡、龍寶神王等の文字を多く列べられて居るが、これには支那の道教的臭味がある。また「囑累品」になると、此の經典は諸國王に附屬すると云ふて、國王に對する法門の記事を讀んで見ると『梵網經』の第四十六、第四十七、第四十八戒と同じやうな説き振りであつて、學者の大到注意されて居る點である。即ち左の如し。

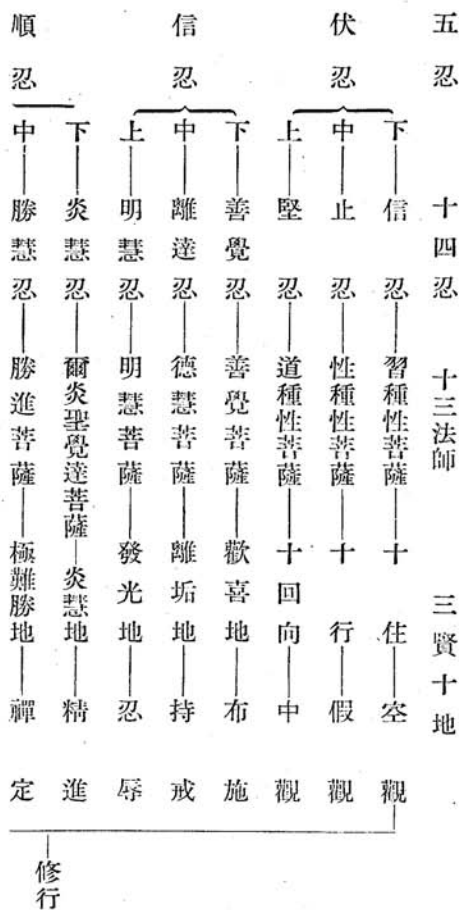
國王大臣、太子王子、自恃高貴、滅破吾法、明作制法、制我四部弟子、比丘比丘尼、不聽出家行道、亦復不聽造作佛像形佛塔形、立統官制衆、安籍記僧、比丘地立、白衣高座、兵奴爲比丘、受別請法、知識比丘、共爲一心、親善比丘、爲作齋會、求福如外道法、都非吾法、當知爾時正法將滅不久云々。(『正藏』八卷八三三丁)

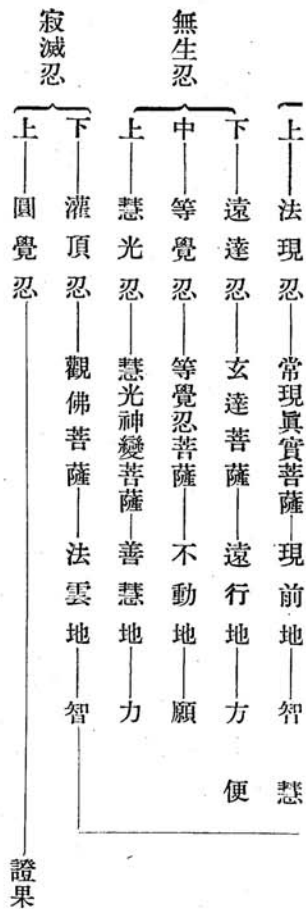
これ等は支那南北朝時代にあつて史實を適切に云ひ顯はしたものとされて居るが、要するに『仁王般若經』の前半は般若を説いたもので、批評すれば多少の疑惑はあるにしても、これは別に取り立て、云ふべき程のものではなからう。然るに其の後半に至りては、最も大切な仁王護國の思想を鼓吹せなければならぬところに、幾多の疑惑が横はつて居るので、思想としては別に悪いと云ふの

ではないが、その記事が密教的であるとか、支那的臭味が濃厚に顯はれて居るとか云ふのである。これに就て私は思ふ。慥かに前半も羅什の譯ではない、それは翻譯のところでも十分に説明したのであるが、兎に角、支那の梁朝時代から失譯の『仁王般若經』があつたもので、それが羅什の如き翻譯の大家が譯したものでない。それよりも遙かに劣つた翻譯家に依つて譯せられ、その前半は般若を述べるところであるから、餘り問題はなかつたが、その後半は一經の肝心たる仁王護國のところを翻譯するのに、譯者自身の考へに依つて、種々なる經典をも參酌し護國の思想を鼓吹したものはなからうか。その後半と雖も、全然梵本がなかつたとは思はれぬ、前半と同じやうに梵本があつたものであるが、たゞ其の國の事情に依つて、譯者自らが大に手加減を雜へたものではなからうか。いま更に「護國品」已下の後半に就き、その大體を述べるならば、先づ「護國品」は護國の精神を發揮したところで、釋尊當時の大國たる十六國の王は此の會座に列し、釋尊の御說法を今や遲しと聽聞して居たのであるから、釋尊は般若に依つて護國の精神を説き、第一に護國、第二に護福、第三に衆難を説いて、護國の必要を徹底的に示されたものであらう。次に「散華品」に於ては國王の歡喜踊躍の散華の形式に依つて顯はし、般若に依つて護國することを勧められ、それを實の如く受持すると云ふのが次ぎの「受持品」で、それを委しく明かされたものであらう。而して此の「受持品」には大切なる法相極めて多く、殊に般若を修行し受持するのに十三法師を票じ、十三觀門を

釋して居る如きは、最も注意を要するところであらう。

この十三觀門は前の「菩薩教化品」にも出て居た五忍を開いて十四忍となしたものと同じである。十四忍の中に於て最後の回覺忍は佛果であるから別として、前の十三忍は是れ盡く修行門である。故に此の「受持品」に於ては委しく十三觀門の修行を擧げ、これが般若波羅蜜を受持する法師なりと云ひ、この十三法師こそ眞に般若の法門を受持し荷擔し弘通する人と云はれたものであらう。いま其の概要を圖示すれば左の如し。





最後に「囑累品」に於ては、この經の附屬を説いて、比丘比丘尼等に附屬せず、信男信男女等に附屬せず、只管國王のみに附屬すると云ふて一經の全體を結んで居らるゝ。

七

已上は極めて簡單ながら一經の内容を述べたのであるが、その記事には疑惑があるにしても、護國の思想は素より充分に發揮せられて居るので、古來より護國の經典として尊崇せられたのも無理はない。我が日本に於て最初に宮中に講ぜらるゝやうになつたのは、齊明天皇の六年春三月であつて、同年夏五月には仁王會なるものが設けられたやうに『元亨釋書』に出て居る。即ち「六年五月、百座百袈裟を造つて百沙門に賜ひ、仁王會を設けらる」ともあるが、これが恐らく仁王會の始めであらうと云はれて居る。それより十七年を經過した天武天皇白鳳五年十一月二十日には、諸國に

仁王般若經に就て

(二五)

『仁王般若經』を講ぜられたと云ひ、持統天皇七年十月二十三日には、宮中に『仁王般若經』を講ぜられたと云ひ、聖武天皇天平元年六月朔日に一代一度は必らず仁王會を宮中に設くる永式を定め給ひ、孝謙天皇天平勝寶二年五月八日には、宮中及び京畿七道に『仁王般若經』を講ぜしめ給ふたと云ひ、爾來歷代の皇室には必らず仁王會を修せ給ふたやうに出て居る。

しかし歷代に一度づゝ修せらるゝ仁王大會なるものと、一年に二度、春秋二期に修せらるゝ仁王會なるものとあつて、その間に多少の儀式に於ける相違があつたやうに思ふが、兎に角、この『仁王般若經』なるものが非常に尊崇せられ、歷代の皇室が重んぜられたと云ふことは深く注意すべきことで、この經が如何に護國の精神に富み、國土を守護する上には、國王が此の經を受持し給ふたかは、この經の末後に説かれた「囑累品」の經文に依つても明瞭なことゝ信ずる。即ち此の經を國王のみに附屬すると云ふてあるが、これは他の一般の經典と大に其の趣きを異にして居る點であらう。私は尙ほ此の『仁王般若經』に於ける般若思想を研討して、他の一般の般若部の經典と比較對照して見たいと思つたのであるが、最早や紙數も多く費やしたことであるから、また別の機會に之れを比較詳論して見たいと思ふ。甚だ平凡なる叙述ではあるが、一言以て仁王般若經に就ての愚考を述べ畢る。(完)